琉球大学学術リポジトリ

離島・へき地という「個性」と美術教育　実践報告　7人のザマミレンジャーによる島創造の物語『ひょっこり座間味島』

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター
	公開日: 2008-04-14
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 吉田, 悦治, 上村, 豊, Yoshida, Etsuji, Uemura, Yutaka
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/5633

離島・へき地という「個性」と美術教育

実践報告

７人のザマミレンジャーによる島創造の物語『ひょっこり座間味島』

Art Education Making the Best Use of the Special Qualities of a Remote Island and Place
A practice report
HYOKKORI ZAMAMIJIMA, a story of Zamami Island Creation by Seven "Zamami Rangers"

吉田悦治*・上村　豊*

Etsuji YOSHIDA* and Yutaka UEMURA*

本報告は、平成18年度後学期「美術科教育法Ｃ」の担当教員と履修生が取り組んだ、座間味村立座間味小学校における図工科の授業実践に関するものである。この実践は、長崎・鹿児島・琉球・３大学連携事業「新しい時代の要請に応える離島教育の革新」（平成18年度文部科学省特別研究費措置事業）研究の一環として行われた。現地での授業は、同小学校２年生のクラスを対象に、2006年12月12・13日の二日間にわたり実施された。題材「ひょっこり座間味島」は、今回の授業実践のために、学生等が中心になって独自に考え出したものである。本報告では、この授業実践について、現地に赴いての事前リサーチや交流から、それらを元にした授業計画の作成とその検討といった種々の準備作業を経て実施に至るまでの経緯をふり返り、さらに、この体験を共有した学生等と教員、それぞれの観点から見いだした課題を提示して、離島・へき地という「個性」と、そのような環境における美術教育の可能性を探るきっかけとしたい。

１．実践過程

はじめに

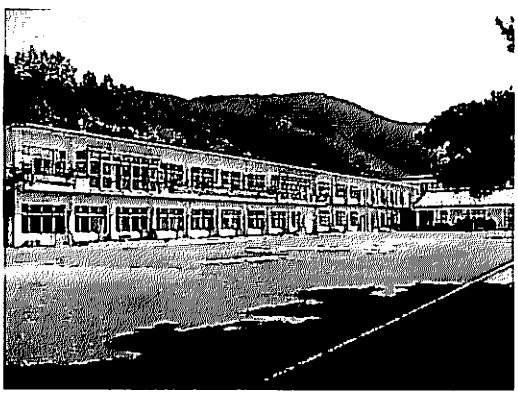
離島・へき地の美術教育を考えるにあたって、多様な実践研究を通した現場の子どもたちや教員たちの生の声が必要になってくる。しかし、へき地校での研究主題は特別活動や地域での体験学習、学力向上の学習指導などが多く、教科に関する研究として美術教育の取り組みは低調と言わざるを得ない。図工・美術教育の研究会などでも、離島・へき地校での実践報告は、残念ながらほとんど見当たらない。

そこで、まずは現場の先生と一緒に図画工作の授業づくりを実践することで、そこから離島・へき地での美術教育を考えるきっかけにしようと試みた。やはり、同じ土俵に立ってみないと見えるものも見えてこないと考えたからである。さらに、学部学生も参加させることで、離島・

* 琉球大学教育学部　Faculty of Education, University of the Ryukyus

へき地校での実践経験が、学生たちにも多様な学校文化と子ども理解に繋げられることを期待して本実践を行なうことにした。

我々を受け入れてくれたのは、那覇市の西方40kmほどの海上に浮かぶ大小20余りの島々からなる座間味村の座間味島にある小さな学校である。慶良間諸島に属する座間味島は夏はダイビング、冬はホエールウォッチングで知られ、その島の中心に位置するのが座間味村立座間味幼・小・中学校である。認定講習（現職教員の教員免許を２種から１種取得への講習）で知り合った座間味小学校の宮平亜希子先生の協力を得て、小学２年生のクラスで図画工作の授業実践を一緒にさせていただくことになった。



座間味村立座間味幼・小・中学校

最初の座間味訪問

一度目の訪問は、我々の厚かましい依頼を快く受け入れてくれた井上園市校長と小学２年生担任の宮平亜希子先生への御挨拶と、授業実践へ向けての打ち合わせも兼ねての訪問であった。校内をぐるっと案内してもらい、その後体育館に行くと、いきなり子どもたちが歌と踊りで歓迎してくれた。熱烈な歓迎を喜んでいると、それは我々のためではなく、実は学芸会？が近いこともあって、たまたま音楽劇「竜宮城のお誕生日会」の舞台練習の時間だった。その日は大雨で、雨漏りのする体育館に雨雫がバケツに落ちて「ポタンッ、ポタンッ」という音が体育館に響き、子どもたちの歌と妙にシンクロしていたのが印象的だった。休み時間になって、子どもたちと自己紹介をすると、最初は緊張気味だったみたいだが、その後たっぷりと座間味っ子から、あの手この手の攻撃を受けた。その日の訪問は短い時間であったが、給食も一緒にごちそうになり、少しはこどもたちと触れ合うことができた。

座間味幼・小・中学校は在籍数117名、学級数は幼＝３（年少＝12名、年中＝13名、年長＝５名　計30名）、小＝６（１年＝11名、2年＝７名，３年＝11名、４年＝10名、５年＝７名，６年＝10名　計56名）中＝３（１年＝13名、２年＝13名、３年５名　計31名）で、全て単式学級である。近年は内地からの移住者が増加し、関わった２年生も７人のうち、もともとから島にいる子は４人だった。

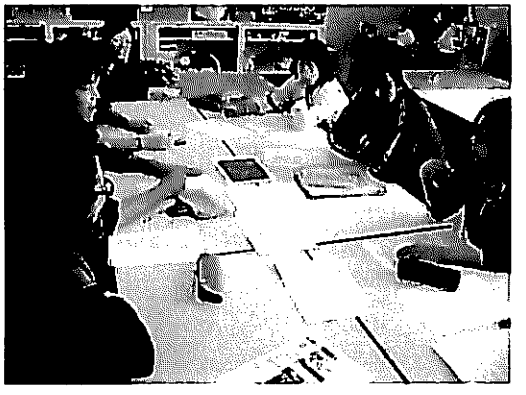
この４人は、幼稚園の年少クラスからずっと一緒。あとの３人は、教職員の子どもで、移動で座間味に家族も連れて赴任された先生の子どもたちであった。学年が変わると、また教職員の移動があるので、その子たちは島から離れることになる。担任の宮平先生によると、みんな活発で体を使った遊びや運動が大好きとのことだった。また、本を読むことも大好きで、月平均の読書冊数は毎月２年生が１番で、まだ11月だけど７人全員が年間読書目標冊数を達成していると言っておられた。他にも、高学年や中学生が身近にいるせいか、教師や周囲の大人にべたべたくっついてこないということや、実は恥ずかしがり屋で、本当は好きだと思っていても逆の表情をしたりするなど、座間味の子ども達についていろいろと教えていただいた。放課後、

小学２年生の教室

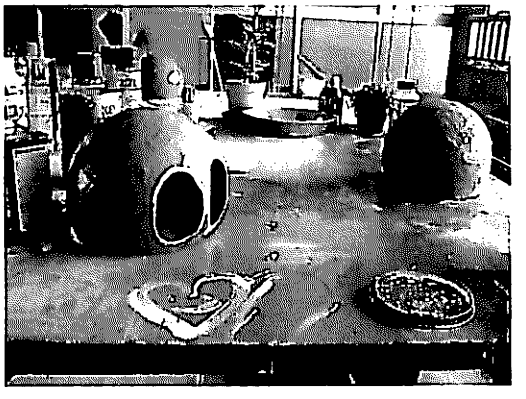
教室に残っている子どもたちに「今度は大学生も一緒に連れてくるから、楽しみにしていてね。」と言うと照れくさそうにはしゃいでいた。宮平先生と次回訪問のスケジュール調整や図画工作の授業見学と子どもたちとの交流会の打ち合わせを終え、港に向かった。

最初の訪問後、座間味での授業に参加する美術科教育法Cの履修学生たち（美術教育・児童教育・島嶼文化教育）に、吉田と上村の第一回訪問時の記録画像を紹介しながら、学校の様子や子どもたちのプチ情報なども交えつつ、次回一緒に訪問するに当たっての打ち合わせを重ねた。その際、学生たちに座間味島や離島の学校について、あまり先入観を持たせぬよう紹介したつもりである。まずは現地に赴き子どもたちや座間味の空気に触れて、自らの眼で得た感覚を大切にしてもらいたいと思っていたからである。

学生たちとの打ち合わせの中で、２年生の子ども達との交流会に向けて、こちらも手ぶらでは行けないだろうということになり、みんなで「おみやげ」を考えることとなった。そして、いくつかのおバカな「おみやげ」案が出された。子どもたちと遊ぶためのレクリエーションネタや、くじら・島の形をしたお菓子ネタ、紙芝居ネタ等が思いつきで提案された。あれこれ考えたものの、結局は座間味の子ども達とのスキンシップも兼ねた、参加型のヒーローショー「ケラマ戦隊ザマミレンジャー」の上演を手みやげにすることとなった。簡単にストーリーを紹介すると、大学生の気さくなお兄さん・お姉さんがやって来ると思いきや、学生たちがえげつない悪役で登場し、担任の宮平先生や座間味の島を襲って子どもたちをビビらせる。そこで、子どもたちに「ケラマ戦隊ザマミレンジャー」に変身するためのアイテム（張り子で作ったパーマンもどきのヘルメット）がどこからともなくやってきて、座間味のヒーローに大変身。７人の勇者になった子どもたちが、悪者となぞなぞ対決をして座間味を守るという、ちょいとクサイお芝居ネタである。子どもたちへ向けてのプレゼントというより、学生たちが張り子細工で変てこなヘルメットを制作したいという趣味に走ったパフォーマンスである。でもまぁ、学生たちが楽しんで工作したモノを手にしてもらい、身近な素材で「こんなものも作れちゃうよ！」というメッセージになるかもと、とりあえず前向きに解釈することで一致した。そんなこんなで、交流会に向けて準備に取りかかり、「なんちゃってヒーローショー」のコスチュームやアイテムの小道具作り、悪役キャラやシナリオの設定などを適度に真面目に制作し、座間味島へいざ出陣となった。



美術科教育法Ｃ授業風景



パーマン？ いえ、「ザマミレンジャー」です。

２度目の座間味訪問

２度目の訪問は一泊二日で、一日目は授業実践に向けて、島の散策や島民とのコミュニケーションを通して、表現活動の題材になりうる素材を収集することと、宮平先生と学生たちとの顔合わせがメインとなる。二日目は、朝から学校を訪問し校長先生からのレクチャーを受け、

続いて２年生との交流会と図画工作の授業参加、さらにオプションとして４年生の図画工作の授業への飛び入り参加など盛り沢山の内容になっていた。出発は午前の先発隊と午後の後発隊に別れ、船に揺られてドンブラコと島に向かった。

２度目の訪問日も朝から雨が降っていたが、先発隊が座間味に着く頃には晴れ間が覗いていた。港まで迎えに来てくれた教育委員会の方の車に乗せてもらい、宿となる村立交流センターに向かった。その車中で、「前回は大雨で、今回は晴れて良かったです。」とお天気の話をしていると、教育委員会の方は「ほんとは、もっと雨が降ってくれるといいんだけど…」とおっしゃっていた。島はダムがあるものの、雨が少ない日が続くと簡単に水不足で断水になる。昨年からの少雨の影響で、学校でも節水教育をし、給食も紙皿や割り箸に代える時もあり、節水に心がけて生活しているとのことだった。貴重な島の水資源というのも題材のキーワードになりそうだと思った。

その後、後発隊が到着するまで、てくてく歩きながら島の散策をした。最初に訪れたのは、ぶらっと立ち寄った「慶良間海洋文化館」。そこは、宮里清五郎さんが運営する私設のミュージアムで、海と島の文化を伝える資料館である。手作り感覚満載で一見雑然と展示されているように見えるが、豊富な資料の数々に圧倒される不思議な空間が広がっていた。展示物は交易で栄えた琉球王朝時代に海を駆けた唐船・進貢（しんこう）船・馬艦（マーラン）船などの模型や本物のサバニが並び、大交易時代の慶良間と進貢船、海上交通の変遷、かつお漁業の発展など、島の歴史について学ぶことできる。民具や漁具などの民俗資料、また特攻艇や当時の新聞記事など沖縄戦に関する展示もあり、現在の穏やかな島の姿からは想像もつかない、戦争の悲惨さについても考えさせられた。そして、何より宮里さんの濃いキャラから語られる島への思いには、久々に琴線を揺すられた。

宮里さんとのお喋りを堪能した後、慶良間の島々を見渡せる高月山の展望台や美しい白浜の古座間味ビーチなどを見て廻った。学生たちは、この身近にある自然の風景やこの島が持つ記憶と子ども達の表現がシンクロするような題材が生み出せないだろうかと相談し合っていた。

後発隊の到着時間に合わせて港に戻り、その日の大学の講義を終えて駆けつけた学生たちと合流。その足で、座間味のメインストリートを抜けて学校へと急いだ。早速、宮平先生と学生たちとの顔合わせをして、明日の交流会で披露する「ケラマ戦隊ザマミレンジャー」についてお話した。すると、ちょうど２年生のあいだで、劇をやりたいという声が上がっていたとのこと。なんとタイムリーな！何ってみると、先月の学芸会？での舞台にどうやら納得がいかなかったようである。子どもたちなりのクオリティーとイメージしていたパフォーマンスが本番で発揮できなかったことが、さらなる表現欲を芽生えさせていたようだった。その話を聞いて学生たちは、なぜか緊張する。しょぼい演技では、間違いなく子どもたちにバカにされてしまう。「宿に戻ったら、ヒーローショーの完成度を上げるために練習だ！」と大学生のプライドを懸けて明日に臨むことを心に誓ったようである。

それはさておき、日々に行なわれている図画工作の授業について、座間味の子どもたちのこれまでの造形体験などを教えていただいた。子どもたちはみんな図工が大好きで、聞くところによると造形遊びを多用した表現活動として、ビニール袋に絵を描いて、運ていに乗せたりその下を潜ったりしながら日常の風景や風・光とコラボレーションするような表現活動等もされているようである。また、松ぼっくりや海岸にある自然素材を使っての工作や、体験した学校行事の思い出を描いた絵画制作などもしているとのこと。現在は、版表現の導入として、粘土で型を取って遊んだり、身のまわりのものに絵の具をつけて写す活動から紙版画への表現へ展開していく予定とのこと。どれも定番の題材でありながら、確実に子どもたちの創造力のツボを刺激し、図工という教科に対して気負いなく子どもたちの表現に寄り添っている様子が窺えた。明日はその授業に参加させていただけるので楽しみでしかたがない。

すっかり日が暮れて、学校を後にし、真っ暗な夜道をぶらぶら歩きながら宿へと向かった。宿では、明日の交流会に備えて学生たちの舞台稽古が遅くまで繰り広げられ、静かな座間味の夜に「ざっまみぃ～れんじゃあ～」の声が何度も響いていた。

交流センターで深夜まで続いた稽古

二日目、「ケラマ戦隊ザマミレンジャー笑（ショー）」の小道具を担いで、子ども達の待つ教室へ突撃。その前に、校長先生からスライドショーを使っての学校の概要説明をレクチャーしてもらい、幼・小・中の各学年の教室・授業風景、その他の学校施設を案内して頂いた。

その後、視聴覚教室に移動し、資料室に隠れてせっせと仕込みをしていると、２年生もやってきて我々の登場を待っている。子どもたちも、カンペを持参して何やら宮平先生と打ち合わせ中。そして、さんざん待たせたあげくにようやく学生の一人が乱入して来て、いよいよ交流会の始まりはじまりぃ～。

最初に登場したのは、ヒーローショーに付き物の妙にテンションの高いお姉さん。もちろん出で立ちは清楚な髪型と健康的なショートパンツに白いハイソックス。「座間味のみんなぁ～、こんにっちわ～」「みどりお姉さんだよっ～」のオープニングに子どもたちも苦笑。

「ヒーローショーのはじまりだよっ～」の声が轟くなか、学生の強引な司会進行に子どもたちも慣れる間もなく、「正義のヒーロー“ザマミレンジャー”をみんなで呼んでみよう！」の声にすっかり押され気味。

こんな具合に始まった交流会。みどりお姉さんの勢いに負けた子どもたちは、その気になって「ザマミレンジャ～」と叫んじゃってます。すると怪しいコスプレの悪役キャラが続いて乱入。子どもたちは、てっきりヒーローに扮した素敵な大学生のお兄さん・お姉さんが現れると思いきや、下品な悪役キャラが不気味な笑い声を響かせ毒づく。「ザマミレンジャーなんて来ねぇんだよ！」「優しい大学生なんかも来ねぇんだよ！」ポカーンとした表情の２年生。そうこうしていると、みどりお姉さんも宮平先生も悪者の餌食となり、このままでは座間味島危うし！みどりお姉さんと宮平先生に促され、もう一度「ザマミレンジャー！」と叫ぶ。すると、さらに怪しい悪役のメンツがぞろぞろやってくる。「エッ～、マジでっ～」てな感じ。

教室も占拠され、逃げ場を失ったみんなは今度こそと、力いっぱい声を振り絞り「ざっまみぃーれんじゃぁぁーーーー早くっ!!」と叫ぶ。その声が届いたのか、ようやくザマミレンジャーのレッドが登場。子どもたちもノリに任せて、レッドを応援。ところが、レッド一人では敵が多すぎて、防戦一方。そこでザマミレッドとともに７人の勇者が立ち上がる。いつのまにやら、子どもたちも寸劇に参加しちゃってます。どこからともなく色とりどりの勇者の印「ザマミレンジャー・ヘルメット」が舞い降りて、レッドを筆頭に「イエロー、オレンジ、バイオレット、グリーン、ライトブルー、ショコラ、抹茶、？？」ただいま参上。さぁ、いよいよ決戦だ！となるはずが…。なぜか、子どもたちの様子が…。「私、この色好きじゃない！」「俺、イエローが良かったのに！」なんと仲間割れっ～。これには、悪者もポッカ～ン。子どもたちにも色の好みはあるようです。しかし、切迫した状況を思い出し、ここはみんなオトナになって、今度はヘルメットの譲り合い！レンジャー同士のヒソヒソ話による交渉も成立し、やっと決戦の舞台と相成りました。後はなぞなぞ対決とかけ算の九九・６の段攻撃でみごとに勝利。見事、座間味の平和は守られたのでした。

勝利のポーズ！

「お楽しみ会」学生達はへとへとです。

てんやわんやの大騒ぎの末、興奮状態のまま交流会は第２部に突入。お互いの自己紹介を済ませると、子どもたちによる我々への歓迎の合唱を元気いっぱいの歌声で聴かせてくれた。そして子どもたちの進行により、分刻みでゲームやらクイズやらのフルコース。あまりのメニューの多さと興奮で予定の時間をオーバー。フラフラになっている学生もいましたが、本当に楽しい時間を過ごすことができました。宮平先生と子どもたちに改めて感謝。

次の時間は宮平先生の指導による図工の授業。題材名は「ペタペタペッタン」。みんなで教室に戻り、我々も参加し授業が行なわれた。各自持ち寄った様々なものに絵の具を着け、大きな白模造紙に型押ししながらの共同制作である。学生たちも指導補助に入り、子どもたちと一緒に制作を楽しんだ。植物で型押ししたり、スポンジやビー玉、容器の蓋などを使って、写し出された形の面白さや偶然生まれた色・形を楽しみながら白模造紙にペタペタと写しとっていた。最初はお行儀よく版遊びをしていた子どもたちだったが、だんだんと全身を使ってのアクション・ペインティングになっていった。手型や足型もペタペタ、絵の具を布に染み込ませ「バチーン」と投げつけたりして、形の上に形が重なり色も混じり合うことで版の表情がどんどん変化していった。偶然写しとられた形から、動物を見立てて描いたり、中には足スタンプを延々と続け、紙が破けても色を重ねて続けてとても美しい作品を制作している子もいた。これには、学生たちの方が関心したようで、ここまで純粋に絵の具と戯れ、色と形で遊ぶことができる彼らの姿を見ていると感動せずには居られなかった。そして、ただやりっぱなしで終えるのではなく、宮平先生は子どもたちの行為から生まれた多様な表現を一枚ずつみんなで見てまわりながら、感想や発見したことなどをお喋りしていた。造形遊びの活動では、ややもするとやりっぱなしで終わってしまい、後はゴミ箱行きという授業も実際多い。しかし、鑑賞の時間もオマケではなく、次に繋げる手だてとして、給食の時間を押してでも作品にちゃんと向き合わせようとしている姿が印象的であった。これは、少人数のクラスだからできることかもしれない。生徒数が多いと、ここまで一人ひとりの行為を見とれないだろう。

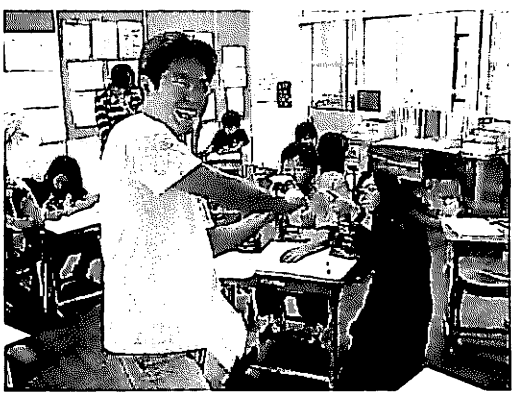
宮平先生による「ペタペタペッタン」

足型で描かれた作品は、紙の裏まで絵の具が染み込み、裏面も美しく複雑な色の重なりでとても魅力ある作品に仕上がっていた。宮平先生

ボディーペインティング

の姿勢に触れて、学生たちも学ぶことが大きかったのではないだろうか。

午後は、４年生の図工の授業に参加させていただいた。その時間は木版画の授業でテーマは自由。その下絵制作の２週目にあたる時間であった。学生と児童の人数がちょうど同じだったので、一人ずつ付く形で参加した。指導にあたるというより、描こうとしている世界についてお喋りしながら、子どもたちとのコミュニケーションを存分に楽しんだ。特に人物の形など、お互いにモデルになって、実際に自分の身体でポーズをとりながら、描きたいところを注意深く観察して描くお手伝いをした。児童の中には、与えられている画用紙の大きさに囚われずに、画用紙を継ぎ足しながら描いている子もいる。また、描きすすめるうちに、現実とは異なっていても描きたいイメージが浮かんだり、新たな視点を加えたいと思ったら、あるはずのないモノ



４年生図工科。モデルも大変です。

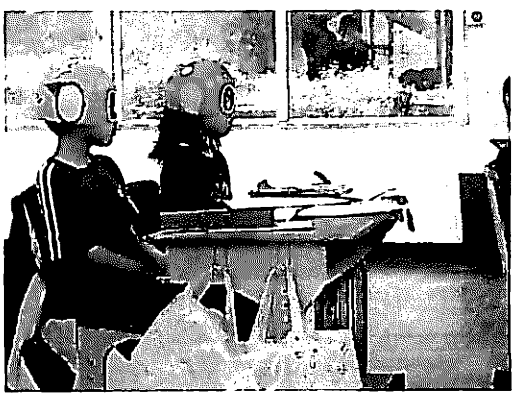
でもジャンジャン描き加えていった。

たった１時間の参加だったので、あっと言う間の時間であった。担任の先生は、版画コンクールを目指しての指導を希望されていたのかもしれないが、画一的な教育版画という不自然なジャンルには加担したくなかったので、ただ子どもたちに描きたいものを描いてもらった。児童画のコンクールに潜む功罪については、都市部であろうが、離島・へき地であろうが関係なく多くの問題がある。このことについては別の機会に検討してみたいと思う。

「足の形って？」

我々が乗る船の時刻が近づき、そろそろ港に向かわなければいけなくなった。２年生の教室にお別れのあいさつに行くと、なんとザマミレンジャーのヘルメットをかぶって授業を受けていた。結構気に入ってくれているみたいだ。お別れのあいさつと12月に一緒にやる図工の時間に乞うご期待と告知もして教室を離れた。そして、宮平先生と次回の授業本番に向けての打ち合わせをした後、港に向かった。港に着いて、しばらくすると４年生の子たちが見送りにきてくれた。「また、来てね！」と照れくさそうに挨拶をしてくれた。

かなりハードなスケジュールだったせいか、



帰り船中は爆睡しながら那覇に戻った。

交流会や授業参加を通して、子どもたちの日常世界にかなり接近することができた。そこで、いよいよ授業実践に向けて内容を具体的に検討することになった。授業は学生たちが中心になってプログラムを提案・企画していくことにした。その授業を宮平先生と吉田・上村がサポートしていくこととなる。まずは、前回の視察を振り返りながら、島で生活する子どもたちの日常世界と彼らの持つ造形体験などを考慮して授業計画・提案を行なった。その際、すでにある借り物の授業実践をするのではなく、また単なる出前授業にするのでもなく、子どもたちとの出会いや島で見いだした視点等から立ち現れてくる表現活動にしたいと考えていた。場合によっては図画工作という枠組みから越境してしまうようなものでも構わないとも考えていた。

学生たちから提案された数々のアイデアを基に意見交換や検討を何度も重ねていった。最初は授業として成立するかどうかとか、与えられた時間内で授業がまとまるかとかは無視して話し合いを続けた。提案されたアイデアは次のようなものであった。

- 児童が経験したことのない「街」「華やかな空間」をつくる。
- 普段島にいない世代との交流プログラム
- ザマミレンジャー続編（きもだめしの巻）
- 実践後も連絡を取り合い、交流が継続していくようなプログラム
- ザマミレンジャー続編（7人が力を合わせ、島に潜む課題・問題を解決する。そのためのアイテムを創造する。）
- メールやテレビ電話を使って、島外との交流プログラム
- 児童にカメラを渡して、学校や島の中を撮影してもらう。
- 「仲良しの樹」（My ツリー・ゲーム）校内や島内で、自分の友達となる特定の樹などを決めて、名前を付ける。実践後も世話をしたり、継続して「友達」との関係を続けていく。
- 島の環境を利用して、様々な場所やものに対する「妄想」を育てる。(座間味・妄想族)
- クジラの中の部屋、クジラの中に住む人（ピノキオ？）
- 「ペタペタペッタン」を発展させる。（指紋や単純な図形などのスタンプを使って「見立て遊び」をする）
- 児童の間で流行中の「サイン」を題材にした授業
- 児童による「島の好きなところ」、島外から来た学生の感じる「島の面白いところ」をお互いに紹介、対比、交換し、新たな「座間味島」を発見する。
- 土遊び（島の土を用いて作った作品を琉大に持ち帰り、焼成して「やきもの」にして児童に贈る）
- 身体を使った表現（白いTシャツを絵の具で「汚していく」ゲームなど）
- 島内を駆け巡り「宝探し」をしながらのクロスカントリー
- ザマミレンジャー続編（「本当の敵は誰だ!?」「我々は何と戦っているのか？」）
- 一緒に島を散策し、児童から島のことを教えてもらう。そこから見つけた素材をもとに、ザマミレンジャーのお話を作り、劇にして上演）
- 島の夜の「暗さ」の印象から、日没後に鑑賞できる、電飾や蓄光・蛍光塗料を使った工作を考える。（クリスマスの雰囲気）
- 児童それぞれが考える（自身を投影させた）キャラクターを作り、それを使ったクレイアニメを制作する。（島内をロケハンして、撮影）
- 座間味島の形をモチーフにする。島を7つの領域にゾーニング（地区分割）して、それぞれのパーツの形をした「アイテム」を作る。いつでも7人が集まって「合体」させれば「座間味島！」
- 座間味「メインストリート」を使った「かけっこ&ペタペタペッタン」大会
- 大きな布を使って、「野染め」共同制作

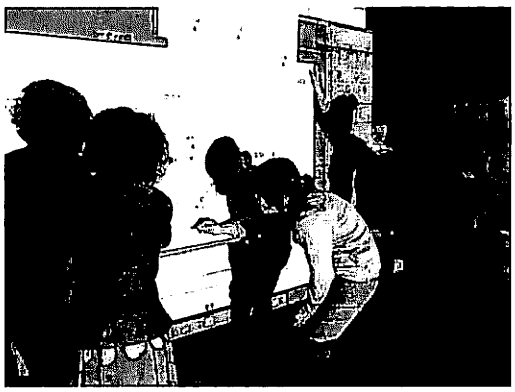
・「ひょっこり座間味島」「僕の島」７人それぞれの「島」を制作。海に浮かべて遊ぶ。（灯籠流しバージョンも）
・使い捨てカメラを使った、子供視線による座間味島写真集。（島の人たちを招待して、スライドショー上映会を開く）
・バスケット「座間味オリジナルゴール」制作・設置
・「世界の名犬ネットワーク会議」（主宰：マリリン）
・「雨天決行／晴天順延」授業（島の大切な資源、雨水。雨が降ったときにしか出来ないプログラムを考える。例えば雨樋や雨漏りバケツを使っての授業）
・スクリーンペインティング「105商店」の前で。

以上のようなアイデアがたくさん登場し、そのアイデア集を宮平先生に連絡し、意見・提案を求めた。その後、その中から主なものについて、より具体的な提案、実施上の課題などの検討に入った。

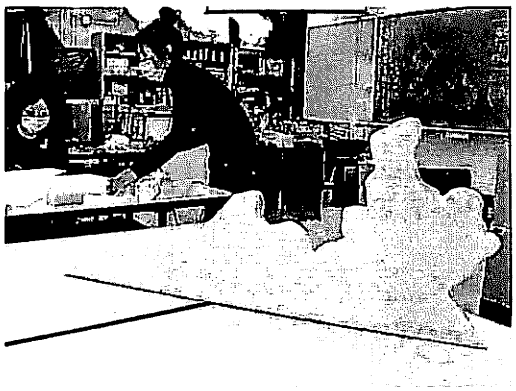
推薦の多かった「小学２年生、座間味を撮る」「ひょっこり座間味島」「ペタペタペッタン２」に絞られ、授業の目的やねらい、スケジュール、材料・道具の問題等も盛り込み授業案を作成した。それを座間味に送り、宮平先生から意見を伺った。

後日、宮平先生よりお電話とFAXをいただき、提案した３案の中から、自分だけの浮き島を創造し、実際に海に浮かべて遊ぶ「ひょっこり座間味島」を実施したいとの返事を受けた。加えて、実施予定日にあたる二日間の学校側の予定を組み込んだ授業計画を提案していただいた。

宮平先生から提案された授業計画をもとに、学生たちと日程、授業時間などを確認の上、授業で使う材料や道具の準備に入った。「島」の基盤となる素材については、軽くて丈夫なスタイロフォーム板（断熱材）を使い、その加工に必要なニクロム線カッター等を用意した。実際に加工の練習も兼ねて、「島」を試作してみた。実際に工作してみて、材料や道具について気がついたことや安全面等を話し合い、授業計画を練っていった。子どもたちが作った「島」を最後に海に浮かべて遊ぶ予定だが、ここ最近は天候が優れず雨が続いていたので雨天時のことも心配されたが、「俺が授業実践やワークショップをやる時は、雨が降ったことないんやで。」という吉田の根拠のない自信に皆不安を抱きつつ準備作業を進めた。材料・道具等をダンボールに詰め込み、荷造りも終え授業の段取りを確認にして、準備完了！



プロジェクターで座間味島の形を転写



切り抜かれた「島」のパート

３度目の訪問（授業実践）

いよいよ授業実践の当日がやってきた。座間味へ向かう船の中では、授業進行役になった学生同士が、授業の導入部分の読み合わせ等の準備でバタバタしていた。座間味に到着し、３校時に間に合うように急いで座間味小に向かった。１日目の授業進行を確認した後、２年生の教室に向かった。そして、子どもたちと再会。さすがに今日はザマミレンジャーのヘルメットは装

着していなかった。我々が持ってきたダンボール箱に興味津々で、材料・道具の準備をしていると皆群がってきた。そして、いよいよ「ひょっこり座間味島」の授業が始まった。

進行役の学生二人が、題材名「ひょっこり座間味島」を板書し、どんな表現活動をするのかを丁寧に説明した。自分で創りたい「島」を自由に工作していくにあたって、子どもたちの発想がより膨らむように、アドリブも交え時間をたっぷり使ってお話した。進行役以外の７名の学生は、子どもたち一人ずつにマンツーマンで指導にあたることになっていた。そのパートナーを決めるために運命のくじ引きが待っている。誰とパートナーになるか、みんなドキドキしているようだ。そして、一人ずつ引いたくじを発表！パートナーになる学生を見て喜んでいる子や恥ずかしそうにしている子、がっかりしている子。そのパートナーの学生とともに、もれなく付いてくる「島」を手に取って、２年生たちの「島」創造の物語が始まった。この時点では、７つの「島」が合体すると座間味島になることは内緒になっている。制作を開始する前に板書された３つの約束「きけんなどうぐをつかうときは先生と！」「ざいりょうはみんなでなかよく！」「うみにうかべることをわすれずに！」を声を出して皆で読み上げた。危険な材料というのは、島の土台にも用いたスタイロフォーム板（断熱材）を加工する時に使うニクロム線カッターやノコギリ等のことである。「島」を創るための材料として準備されたものにはスタイロフォームの断片、紙粘土、棒材、ペンキ、モール、風船、日用品などである。子どもたちもペットボトルや発砲スチロール材等、各自思い思いの材料を用意してくれていた。

ちょっぴり残念だったのは、一人だけ体調を崩して朝から保健室でダウンしている子がいたことだ。風邪をひいて、熱もあったようだ。今日のために無理して登校してくれたのかもしれない。早退するためにランドセルを取りに教室に現れたが、とてもしんどそうだった。

みんなも心配そうに、その子にバイバイした。

いつもより一人少ない教室では、用意された材料を物色する子、ペンキで「島」を塗り始める子、パートナーの学生と作戦会議をしている子など、みんな制作するための場所を陣取り活動がスタートした。どうすれば考えたような「島」を創れるか、「島」のかたちとにらめっこ。なかなかアイデアが浮かばない子もいたが、焦らずゆっくりと取り組んでもらった。

教室の後ろに陣取って黙々と作業を続けている男の子がいる。彼のなかには、もうすでの「島」のストーリーが生まれているようだ。紙粘土で作られた大きな動物のかたちがドーンと横たわっているのが印象的。材料の貼付に綿棒を使って丁寧に接着材を塗ったり、ペンキを絶妙に混ぜ合わせ、完全に混ざりきらない状態で大胆に塗りつける。繊細さと力強さが同居するその姿は、けっこう職人っぽい。聞いてみると「島」に大きなアザラシが襲来して、大暴れしているらしい。

職人技！？

一方、パートナーの学生とお喋りを楽しみながら、キラキラしたモールをはさみでチョキチョキしている女の子。モールについたフサフサの毛部分を切っている。切り落としたモノは、キラキラのラメにするようだ。「島」の上には、ほとんど何も形作られていないが、楽しそうにずっとチョキチョキやっている。キラキラでゴージャスな「島」が生まれるのであろうか。

あっという間の午前の２時間（３・４校時）が過ぎて昼休み。子どもたちは給食。我々もしばし休憩。午後も１時間、図工の時間になって

おしゃべりも大事な制作プロセス

みんなの島を合体させると…。

いる。今日と明日は、図工づくしです。もう勘弁してくれと言われても、もう止まりません。

午後の授業が始まり、子どもたちも再び戦闘開始！

またまた、教室が活気づいて、それぞれの制作も順調そうに見えます。そんな時、一人の女の子がパートナーの学生にこんな一言。「もう手伝わなくていいからね。」なんと決別宣言！いやいや、そういう訳ではありません。その子は作業を自分一人の力でやり遂げたいという決意表明だったようです。学生は一瞬戸惑い、自分は邪魔な存在だったのかなと不安になったようですが、彼女の言葉に込められた、自分の力でこの「島」を作り上げるんだという創造の冒険心に深く打たれたようでした。２年生だからとか、子どもだからと舐めていたら、とんとお門違いでやんす。使う材料も決して扱いやすい材料ではないけれど、精一杯の工夫を凝らしてがんばっていた。

「もう、手伝わなくていいからね。」「…。」

時間が経つのは、なんて早いんでしょう。悩ましいかぎりです。

もう、午後の終了時間が近づいてきました。もう少し続行したいところですが、ここまでの作業を振り返る時間も大切。それぞれが想い描いた「島」を、工夫したところや難儀だった作業のことなど、一人ずつ発表してもらった。どれも楽しく、面白く、想像力たくましい「島」の物語を語ってくれた。

そんな時、ここまで内緒にしていた、みんなの「島」が合体すると座間味島のかたちになることを発見。宮平先生の問いかけにより、「島」のパズルごっこの始まりです。ところが、うまく合体しません。「座間味のカタチって…？」何度も挑戦し、座間味の地図も登場し、ようやく合体完成！「おっ～！」という歓声！

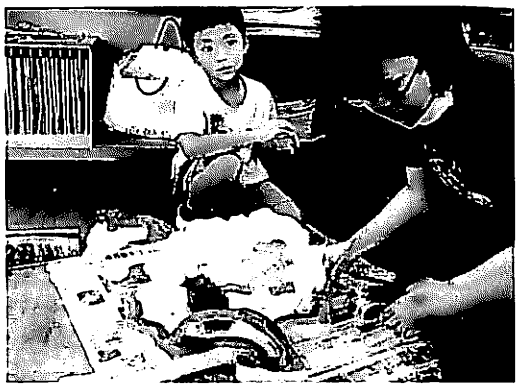
「明日はいよいよ「島」を仕上げて、海に浮かばせます。」

「今日のところは、これにてザミミレンジャー解散！」

授業二日目、お天気は良好。みんなが創った「島」を海に浮かべて遊ぶこともできそうだ。その前に「島」づくりの仕上げに取り組みましょう。今日は１校時から図工。午前の授業は全て図工。もう、逃げられません。図工だよっ、全員集合！みんなもヤル気満々です。教室や廊下には、なぜか小さな白い鳥たちも飛び回っています。子どもたちが創造している「島」に舞い降りた住人かもしれません。

昨日に引き続き、教室には子どもたちの溢れる感性が充満して、心地良い息苦しさを感じます。

昨日の作業を振り返りつつ、宮平先生と学生二人による三つ子ショーの開幕です（三姉妹に扮する彼女たちの女の心意気が大爆発!～）。宮平先生、変なことばかりお願いしてごめんなさい。しょぼい小ネタも交えながら今日の流れを確認したら、戦闘配置。ここまで来たら、我々に出来ることは、ただ子どもたちの表現を見守るだけです。



雲と虹のアーチ

「島」に紙コップを積み上げ高層建築を工事中の子が居ます。色とりどりのテープや風船で装飾し、建設現場はカーニバル状態。そこに、バスケットボールのゴールリングが装着されてます。彼女は、バスケ部に所属しており、毎日練習に汗を流しているのです。バスケットボールが楽しめるスタジアム仕様の「島」の姿が現れてきました。気が付くと、彼女の姿が見えません。いや、居ました。なんと、おいしそうな「団子」を爪楊枝に刺して手にしているではありませんか。すると「これ、おだんごじゃないよ！」失礼しました。ペンキ塗り立てのバスケのボールを乾燥中だった。でも、お団子を暖め中に見える姿に、思わず笑ってしまいました。

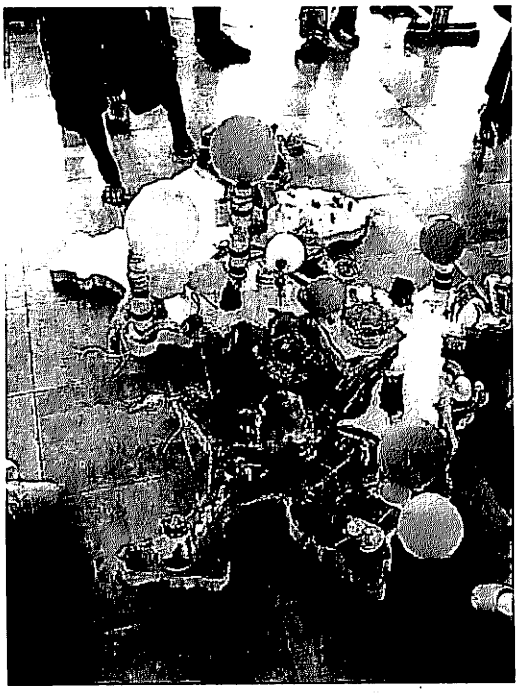
「島」を覆い尽くさんばかりの、巨大な雲のアーチをかけている子もいます。綿を針金にからませ、悪戦苦闘しながら「島」の上空にセッティング。その島内にはノコギリ屋根の建物や雪だるまが、絶妙に配置されています。虹の橋も架かったその「島」は、不思議な郷愁を漂わせています。彼は、「島」に色を塗っている時に絵の具同士が混ざり合うのを気にして、何度も拭き取っていました。でもその拭き取った紙の中で、色と色が混ざり合っているのを見て「きれい！」とつぶやいていた。色に対して新しい発見もしているようでした。初めて使うニクロム線カッターにも、果敢に挑戦し夢中になって木や橋を創っていました。

「お団子じゃないよ！」

お菓子の「島」もありました。ペロペロキャンディのモニュメントが印象的で、小高い山の向こうにビー玉が庭石にように配置され、素朴な館が庵のようにも見えます。スイートな枯山水の庭園が舞い降りたような「島」です。彼女は最初、具体的なアイデアが浮かばず、パートナーの学生に頼って制作していたようですが、二日目は自ら進んでアイデアを出して「島」をつくっていました。友達の「島」からも刺激を受けたようで、友達の工夫を自分の「島」にも取り入れながら、制作を続けていました。

みんなが創った「島」も完成し、あらためて合体させてみました。そこには、すごい迫力のある「島」がお目見えしました。どれもユニークで個性的なものばかりです。「島」と「島」の繋がりは特に意識せず制作したのに、不思議な統一感も感じられました。それぞれの「島」を鑑賞しながら、パートナーの学生も従え一人ずつの発表と全員での記念撮影。その後、多くのギャラリーに見送られて、いよいよ海に出発です。

「お菓子の島です。」



ついに完成！「ひょっこり座間味島」

外に出ると、太陽が燦々と照る絶好の漂流日和です。港近くの浜まで、自慢の「島」を見せびらかして大行進！見知らぬ応援団まで、参加しています。浜辺に着いたら、みんなの「島」の進水式。さぁ、思う存分遊んじゃってください。

海のなかにみんなも浸かって、「島」を漂流させてます。もう12月というのに、みんな腰近くまで海に浸かってビッチョビチョ！大人たちの声も無視して、どんどん浸かっていく、そして流れていく。海に浮かんだ島々は色とりどりで、すごく鮮やかな光景だった。

座間味沖10mの海上で漂う島々をたぐり寄せ、陽の当たる洋上でも、またもや合体！でも、波に誘われ、風に流され合体してもすぐに離ればなれ。２年生の子どもたちも、この７人のメンバーで勉学を共にするのは残り３ケ月。離ればなれになっても、ずっとこの「ひょっこり座間味島」の住人でいてほしいものである。

2．授業進行記録

1日目（12月12日）

授業前準備

○　工作材料・道具類を教室へ持ち込む

○　授業の題材名、イメージイラストを板書。
休み中の児童と交流

3校時（10：45～11：30）　4校時（11：45～12：30）

○　顔合わせ・あいさつ

担任の宮平教諭から、今回の授業実践についての説明、導入。進行役の学生2名が主導して、授業を始める。（2人はおそろいのシャツを着ている）学生等による自己紹介とあいさつ。前回訪問時のことなどを話題にしながら、先生役の学生の顔や名前を思い出してもらう。

○　題材の発表

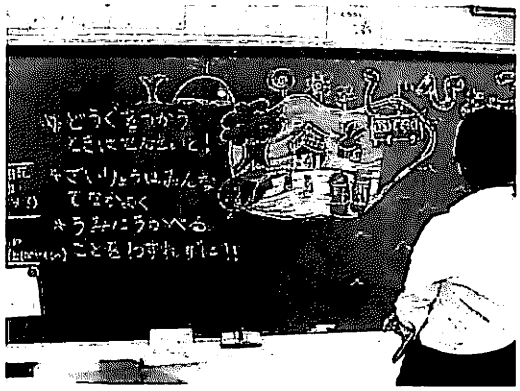
題材「ひょっこり座間味島」を発表。「今日はみんなに島を作ってもらいます。」座間味村の村章を描いた段ボール箱から、スタイロフォーム製の「島」の土台を取り出して見せる。児童等はまだ、ぴんと来ない様子。

○　制作のパートナーを決め「島」の土台を配付

あらかじめ用意したカードくじを配り、パートナーとなる学生を決める。ひとりずつパートナーの名前を呼んでもらい、学生は「島」の土台をひとつずつ持って、指名された児童のもとへ。

○　「島」のイメージを出し合う

進行役が全体に「どんな島がつくりたいですか。」「島にはどんな生き物がいますか。」「島には何がありますか。」など質問を投げかけ、子ども達から島のイメージや構成要素を引き出す。直接応える子、パートナーの学生と相談する子。各ペアからだされたイメージを、進行役が、板書した島の輪郭の上に描き加えていく。この段階では、あまり積極的な反応は得られなかった。



○　材料・道具の扱いなど工作上の注意事項を伝える

ある程度意見が出たところで区切りをつけ、静かにさせ教壇に注目させる。工作にあたっての注意事項を伝える。板書した三箇条を皆で音読する。こちらで用意した材料や道具を見せ、手にとって確認してもらう。特にスタイロフォームや加工用のニクロム線カッター、接着剤など普段使い慣れていないものや、危険を伴うものについて説明し、作業を行うときは必ず学生と共に行うなどの注意を払う。

○　制作開始

机を移動し、床に新聞紙を敷いて、それぞれの作業スペースを作る。（作業は基本的に床面で行う）

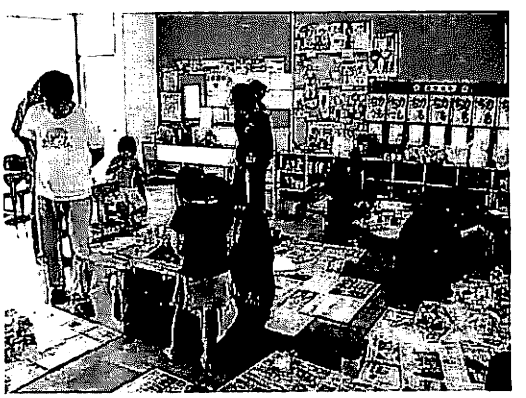
ペア毎に、自分が作りたい島のイメージについて会話をするところから始める。具体的なイメージを引き出すために、用意された材料や子ども達が持参した材料などを選んだり触ったりしながら考える。パートナーの学生は、子どもの主体性を引き出すよう、基本的には聞き役と制作の補佐役に徹するが、希望や相談に応じて、材料や道具、加工法などを紹介・提案する。またイメージする形や色に近づけるために、技術的に難しい作業が必要な場合は、これを支援したり、代行したりする。

制作開始からしばらくは、なかなか作業に入れなかったり、イメージがまとまらなかったりする子が多かった。

事前に、土台の塗装は、乾燥時間を考慮して早めに始めさせるよう打合せを行っていたが、与えられた「島」に色を塗ってみることがきっかけとなって、制作に集中しだした子が多かったようだ。

また、それぞれに島を構成するための、主な材料や部品の形が決まってくると、自然に制作が展開し始める。

制作のペースや、段取りは、出来るだけ子どもに任せたため、ペアによって進行の仕方が随分違う。また、学生等は、作業の中で、パートナーとなった子どもの個性を徐々に把握しながら、ペアとしての関係づくりにも気



を配っていたようだ。

※途中、適宜休憩を挟みながら制作を続ける

○　片づけ

４校時終了の10分ほど前に、進行役から全体に呼びかけ、一旦作業を中断させる。午後も作業を続けるため、作りかけの「島」はそのままに、ゴミを片づけ、材料や道具を整理・返却し、使いかけの塗料にはラップをして保存。

○　進行状況の確認、ふり返り

教壇のまわりに集まってもらい、進行役から今までの作業をふり返り、この後の作業について、簡単に説明して解散。

12：30～14：20

昼食・休憩

※子供たちは、給食、清掃、ふれあいタイム（休憩）

５校時（14：20～15：05）

○　事前に準備した学生等による「島」の試作を見せる。

午後の制作に弾みをつける目的で、事前に用意した「島」を見せる。この試作にあたっては、意図的にカラフルに、また色々な種類の材料や加工法を組み合わせるよう工夫した。またこの「島」は、実際の座間味島の形を模しており、後に「ひょっこり座間味島」の仕掛けを発表するための伏線にもなるようにした。

○　制作再開

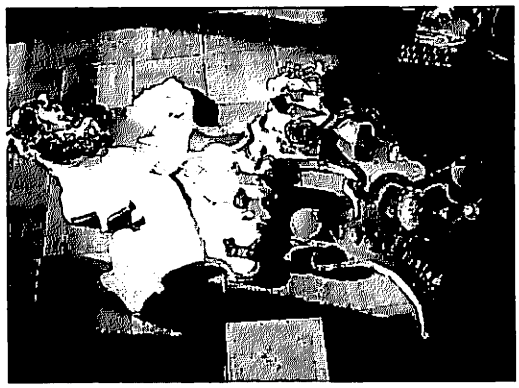
再びペア毎に分かれて制作の続きをおこなう。午前中の作業で徐々に見えてきた方向性を、さらに推し進める。この時間で作品の「密度」がかなり上がり、それぞれの「島」のイメージがハッキリしてきた。

○　片づけ

翌日も作業が続くため、昼休みと同様の片づけ、作業場の整理を行う。

○　中間発表会

教壇のまわりに集まり、ひとりずつ前に出て制作中の「島」を見せながら、自分のイメージや、工作の感想を述べてもらう。進行役は、



横に立ってコメントを補佐。質問なども行う。

○　各自の島を合体して「ひょっこり座間味島」出現

かねての打合せ通り、宮平教諭から「みんながつくった島、なんか見たことのある形をしていませんか。」と子どもたちに質問してもらう。

子どもたちからは、「これ、くっつくんじゃないか。」「パズルだ。」などの反応。ちょっとした騒ぎの中で、それぞれの「島」が合体して「ひょっこり座間味島」になることが判明（発表？）

皆で、合体作業に没頭。意外に難しく、途中から座間味島の地図を見ながら、組み合わせていく。

ついに現れた「ひょっこり座間味島」の姿を皆で楽しんで、１日目の授業終了。

○　１日目終わりのあいさつ

放課後

○　作品の現状撮影

○　残った児童等と交流

○　作品を見ながら反省会、２日目の授業に進め方について打合せ。

○　教員との意見交換

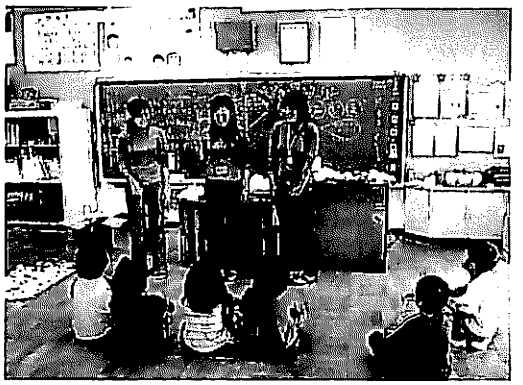
職員会議を終えた座間味小の先生方が、教室に寄って下さり、完成間近の「ひょっこり座間味島」を囲んで、感想や意見を頂いた。個々のパートについても、造形に表れた、作者の子どもの「その子らしさ」や「意外性」についてお聞きすることができた。

２日目（12月13日）

授業前

○　あいさつ・交流

この日は、宮平教諭にも協力してもらい、進行役の２人と同じセーターを着てもらった。（実は三つ子の先生だった、という設定らしい。そのねらいは定かではないが、子どもたちが一瞬顔を輝かせたのも事実だった。）



１校時（８：40～９：25）　２校時（９：40～10：25）

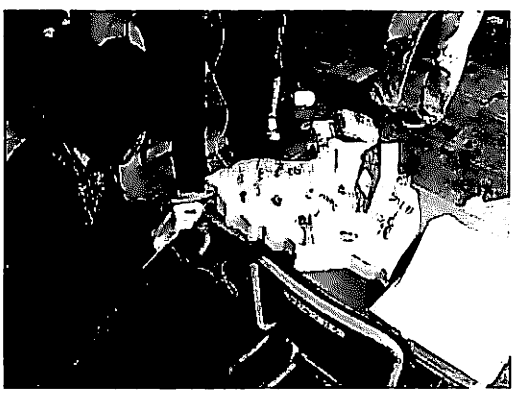
○　制作続き

昨日中にほぼ完成して、少し時間をもてあます子もいたが、ほとんどの子は、この日さらに新たなアイデアや材料にチャレンジして、さらに「島」をパワーアップさせた。

制作時間終了間際になって、ずっと準備してきた部品を一気に組み合わせて完成させた子もいた。また、勢い余って「島」に乗り切らない（関係のない？）オブジェを作った子もいた。

○　ひもつけ、防水塗装

海に浮かべて遊ぶために、「島」に紐を取り付ける作業は、主にパートナーの学生が行った。また、塗料や接着剤が水に溶けないように、全体に防水ニスをスプレー塗装する作業も、学生と共に、玄関の外に出て行う。



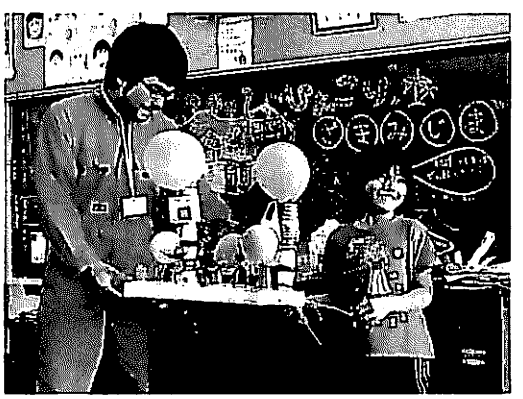
○　片づけ

３校時（10：45～11：30）　４校時（11：45～12：30）

○　発表会

完成した「島」の最終発表は、パートナーの学生と２人で行った。「島」の名前や、テーマ、工作で工夫したところ、難しかった所などコメントをしてもらう。

再び、合体させて「ひょっこり座間味島」を完成させ、記念撮影。



○　完成した「島」を持って、座間味港へ向かう

「島」は学生が持ち、子どもたちは「お着替えセット」を持って列を作り、宮平教諭の先導で徒歩５分の座間味港へ向かう。

○　座間味港・砂浜に「島」を浮かべて遊ぶ

港の一角のこぢんまりした砂浜に集合。海に入る前に、宮平教諭から注意事項。（勝手に深いところに行かない。コンクリートの護岸部分など滑りやすいので注意する、等。）いよいよ「島」着水。すべての島が転覆もなく無事浮かび、皆喜ぶ。

最初は、膝下ぐらいの深さで浮かべて遊んでいたが、そのうち紐を目一杯伸ばして、どこまで沖に進められるか、競争のようなことになる。子どもにせがまれて、途中で紐を継ぎ足した「島」も。気が付くと、子どもたちは島に引っ張られるようにどんどん沖へ向かって歩き出し、中には胸まで水に浸かる子も。

井上校長や、他の先生方も数名、見物と補助に来て下さった。子どもたちが、だんだん興奮して、水遊びがエスカレートしてきたので、「島」を回収させ、浜近くに集まって、水上での「合体」を試みるが、ぷかぷかと揺れてなかなか旨く組み合わせることが出来ない。一瞬、「ひょっこり座間味島」が出来るも、直ぐに離ればなれに。

○　「島遊び」終了

これを区切りに、「島遊び」を切り上げ、浜に上がるよう指示される。子どもたちは、砂を払い、身体を拭いて、着替えをする。

○　学校へ戻る

○　「ひょっこり座間味島」ふり返り会

教室へ戻り、子どもたちに一人ずつ、授業の感想を述べてもらった。学生等も一人ずつ、感想とお礼、あいさつを返す。

12：30～　休憩・昼食　児童たちは給食

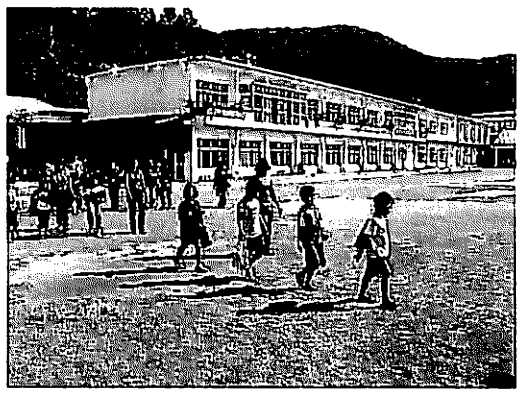
13：40～

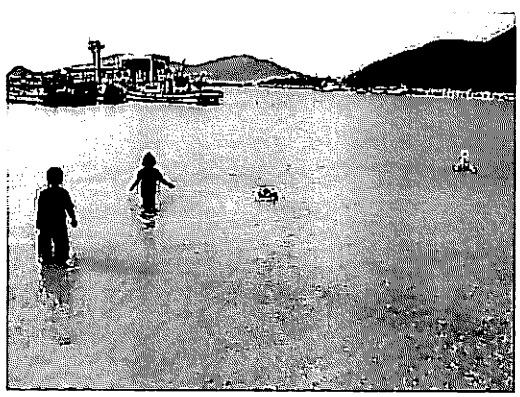
○　お別れ会

掃除の時間をお借りして、最後のお別れを行う。吉田、上村からも、子どもたち、宮平教諭にお礼とコメント。

14：00

座間味小を辞す。





3．授業実践「ひょっこり座間味島」をふり返って～学生レポートから～

授業実践終了後、「美術科教育法C」では、この実践に参加した履修学生に、授業をふり返ってのレポートを提出してもらった。これは学生等に、自ら企画・準備した授業を実際に行ってみて、どのような感触を得たのか、現地での記憶がまだ残っている内に記録してもらうことが目的である。

それと同時に、われわれの提案を受け入れてくれた座間味小の宮平先生を始めとする教員スタッフの皆さんへのとりあえずの返礼として、(学生に作ってもらった子どもたちへのメッセージと共に）送付させて頂いた。

この節では、この学生達の感想をもとに、今回の実践の体験から、離島・へき地における美術教育について、今後へ向けていくつかの課題を提示したいと思う。

少人数学級という特性について

今回の授業は、７人の児童に対して、先生役の学生９名で行った。（また、座間味小側の協力で二日間に渡り合計７校時連続で図工の時間を作って頂いた。）これは、もちろん通常の学校現場ではありえない「特別な」授業形態であり、学生等もそれを認識した上で、この条件を最大限活かした指導法、スタッフ配置を考えた。すなわち、児童１名につき１名の指導員が付き、それぞれ個別に密着して指導を行う「マンツーマン」を軸として、全体の進行は別の２名の進行役が分担するという方式である。

学生のレポートからも、このような授業の進め方の利点が挙げられている。

○　「どんなのを作りたいの？」と聞いてもなかなか教えてくれず、あれこれと案を提示しようかと考えましたが、作品にじっくり向かい合っているのを邪魔しないよう…

○　島に色を塗っているときに絵の具同士が混ざり合うことがあり…初めのうちはそのつどふき取っていました。何度目かにそのふき取った紙の中で色と色が混ざり合っているのを見て…「きれい」と表現したことに少し感動しました。

○　児童一人一人との濃い関係は…今回の授業を通してその大切さを学ぶことができました。

○　彼女（パートナーの児童）から言われた印象的な一言が「もう手伝わなくて良いからね」でした。…作業を自分一人の力でやり遂げたいという意味合いのようで、とても嬉しく思いました。

○　１人の先生とじっくり接する事で、丁寧に作品にとりくみ、いろいろな加工方法を感じとることが出来る時間であったと思います。

○　…子どもも先生も割と自然に集中して取り組んでくれたので全体を見てまわる余裕もできました。…本当に一人一人がつくるもの（島）に個性があるなあ、と感心しました。正直、こだわり方も予想以上！もしも40人などの大クラスだったら、こういった一人一人の変化には気づかなかったかもしれません。

○　（パートナーの児童は）クジで私を引いたときからちょっと嫌そうな顔をしていました。…「何か好きなことある？」と聞いたら「無い」と答えたので非常に困りました。…たくさんの材料の中から使いたいものを見付けて、作りながら考えることにしました。そうすると、私と（児童の）中でいろんな案が出てきて、どんどん進んでいきました。おそらく一日目の時点で一番島に物が乗っかっていたと思います。ただ、私に対するそっけない態度は最後までそのままでした。二日目に完成して海に浮かべたときは…紐の長さがみんなのものよりはるかに長くて、…ちょっと得意げな顔が印象的でした。

○　担当した児童には、のんびりマイペースでいながらも納得いくまで熱心に取り組む姿が見られ…大人の目から見るとどうしても要領の良さで考えてしまいがちでもどかしい思いも少しありましたが…彼女の納得いく制作になることを優先して…

これらのレポートから、それぞれのペアにお

いて、学生がかなりじっくりと関係をつくりながら、児童の自主性を引き出す時間的余裕があったように見受けられる。

一方で、このような一対一の関係を授業の基本に据えることによるデメリット、つまりその閉鎖的な側面を指摘する意見もあった。

○　私が一番感じたのは、授業の中で子どもたち同士の関わり合いを上手くつくれなかったということです。
○　それぞれが一生懸命つくった作品の細かな部分や、制作上の工夫などをもう少し全体で共有することが出来たのでは…
○　…島のお隣同士や友達同士など、大学生以外との関わりをもう少し持つことで、もっと多様な島の世界観を生み出すことが…可能だったのでは…
○　せっかくの作品の良さをわからないまま通り過ぎてしまうのはすごくもったいない…もっとたくさんの人（全校生徒や、教師、父兄の方々等）に是非見ていただいて、いろんな良さに気づいて…子ども達に伝えてあげてほしいです。…意図していない良さや感じたことを制作者が知ることも…すごく大事なことだと感じます。

マンツーマンの指導で、児童ひとりひとりの個性に寄り添い、それを引き出すことと同時に、今回の授業では、個々の作品を組み合わせると、実は大きな座間味島の形が出来上がるという仕掛けを施すことで、「共同制作」としての側面を持たせるよう工夫された。これがこの題材「ひょっこり座間味島」の一番の「ミソ」というか「落ち」でもある。

○　（最後に完成した島を合体させてみると）一日目のときよりも迫力が出ていて、それぞれの島が個性的であるにもかかわらず、なんとなく統一感があり、すごく面白い作品になっていた。一日目の最後に島をつなげることにより、それぞれ良い刺激を受け、他人の良いところを自分の島にも生かすことを考えた結果、このような作品が生まれたのだとおもう。

美術教育の“リアル”“日常”

さて、今回の授業は、ここまでふり返ってきた様子からも伺えるように、多少（多分に？）「芝居がかった」手法を用いて行われたと言える。そもそもリサーチのための事前訪問の際に、児童との交流のために創作「ヒーローショー」を上演したり、授業の際に、司会役の学生が担任教諭も巻き込んで、ある種のコスプレというか、ロールプレイングによって、授業を展開させたり。

これは、この授業実践が一種の「研究授業」的な形態で行われ、授業を企画・実践した学生達自身が、我々を含めた他の教員から見られている、つまり授業自体を「見せる」という構造が、意識的にも無意識的にも反映した結果にも見える。

しかしそれ以前に、学生達個人個人が、短い日程の中でどのように子ども達と出会いそして関係をつくることができるか。授業案を練る中で、このことが大きな課題として浮かび上がってきて、それに対する試行錯誤の結果として、自然に採られた方法でもあると思われる。

ほとんどの学生は、中学校での教育実習の経験はあるが、小学校、特に低学年の児童に授業を行うのは初めてという者が多かった。初めて出会う子ども達との間に、どのような共通の話題や題材あるのか。どうやって創作の時間に引き込むことが出来るのか。また、自分たちが大切だと考えている美術教育のエッセンスを、今回の現場で子ども達に感じ取ってもらうには、どうしたら良いのか。

学生達自身も、授業の中で自ら設定した役割を「演じ」ながら、色々と思い悩んだようである。

○　題材について…はじめは自然の素材だけでつくろうか、海にそのまま流した方がいいのではないかななど考えていたのですが…
○　どうもシナリオが出来すぎていてしまって予定通りになったことが、逆に反省点かなと

いう気もします。

○　終わってみると、今までにもあるような授業だったのでは、とも思います。材料を準備・調達する過程や、自分の住んでいる島に対しての想いや考えなど…（子どもが）主体的に動く場面があってもおもしろかったのではないか…

○　私達の場合、子どもということを意識しすぎて逆に自分自身が子どもっぽい話し方になっていた気がします。

○　実際の現場では可能なのか心配です。丁寧にやりたくてもできないジレンマの中でどこに比重をおいて授業を組み立てるか。やはり普段の子ども達の生活ときちんと向かい合っているかが問われるのだと感じました。

○　もし…みんなで一つの島を創っていたら…トラブルが起きるかもしれませんが、お互いで意識し合ったり、影響し合って子どもの世界観に揺さぶりが起こるのは、…とても大切なことのように感じられた…

創作活動の中で、人と触れ合い、身のまわりのものを素材として扱うことで、自分のいる環境や日常に対する見方・感じ方が変化し、（大げさに言えば）子ども達が世界に対して持つ「リアリティー」の体験的転換といったことが起こりうる。学生達のレポートからは、このような美術教育の持つ可能性に対する期待と課題の投げかけが感じられる。

"島"という"個性"をどう捉えるか

最後に、多くの学生が印象に残った出来事としてレポートに挙げている、２年生の宮平教諭の言葉がある。

「離島だから特別な授業をするということではなく、本島にいる子と同じように授業をやりたい。」

○　高校がない座間味では、中学を卒業すれば本島に出て行くことになるし、出来るだけ本島の子たちと同じように教育していきたいとのことだった。…座間味ならではの学習…と考えていたので、その意見を聞いたとき意外に思った。

○　自分は…「できるだけ島でしか出来ないような独自の取り組みをしなくては…」と必要以上にこだわっていたり、…勝手なイメージを抱いていなかったかなど、…見つめ直すようになりました。

○　しかし、教材や材料など、本島のようにはいかないギャップも多少あるのではないか…自分の中でどの様に折り合いを付けるかが難しいところだと感じました。

○　でも"座間味ならでは"の教育には、きっと日々の生活で、または彼らがいつかもっと年齢を重ねたときに向き合う個々の存在みたいなもののすごく大きな部分を成しているのだと思いました。

このようなある種の「矛盾」に触れ、自らの立場や関わり方についても、その「矛盾」の中で考える。そのことが、今回の体験の中で学生達が行った最もリアルな「実践」だったのではないだろうか。

［参加学生］

琉球大学教育学部

金城由桂（児童教育４年）　登野盛利奈（美術教育４年）　川添千沙（島嶼文化３年）

酒井浩太（島嶼文化３年）　津覇実和子（美術教育３年）　當銘友紀（美術教育３年）

戸ヶ瀬哲平（美術教育３年）　西村緑（美術教育３年）　屋良朝美（科目等履修生）

４．まとめ

今回の授業実践は、二日間という短期間であり、実施するまでに１ヶ月半にわたって準備をしたとは言え、「離島・へき地における美術教育の課題と可能性」という大きなテーマを考える過程においては、ほんの端緒に過ぎない。「全てはこれから」ということは重々承知の上で、生々しく「体験」したことの意味をこれか

らも考えていくために、「鉄は熱い内に」との気持ちで報告をまとめた。

結果、いわゆる「考察」の部分がすっぽり抜け落ちてしまった感も否めないが、我々としてはこれを「中間報告」と位置づけ（強引に思い込み）、さらにその成果を来年度以降の「実践」に活かしていきたいと考えている。

謝辞

今回の授業実践にあたり、あらゆる面でご協力いただいた、座間味小学校の２年生担任・宮平亜希子教諭と、同校の井上園市校長をはじめとする教職員スタッフの皆さんに、深くお礼申し上げます。そして、なにより一緒に遊んでくれた子ども達、どうもありがとう。